

琵琶湖一周を歩いて

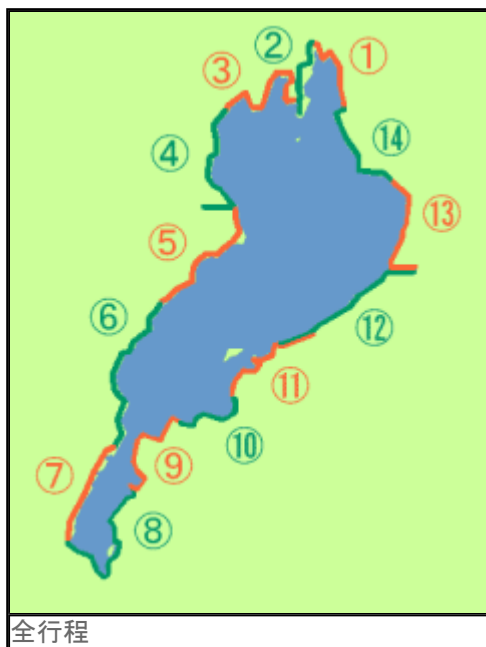
以下の文章は2004年2月10日発行の「環境監視 95号」に掲載されたものに若干の加筆修正を行ったものです。

1. はじめに

2003年4月9日から月に1～3回程度のペースで、琵琶湖の周りを歩き始めました。結果、12月23日まで全14日かけて一周を完歩することが出来ました。私は自動車などを用いた琵琶湖一周なら何度も行っていますが、それでは断続的な幾つかの琵琶湖の横顔を見ているに過ぎず、連続した形での一つの湖としての琵琶湖を(と言っても表面だけですが)見たいということ、そして単純に琵琶湖の大きさを自分の身体を用いて実感したいということが動機でした。また、デジタルカメラの撮影練習も兼ねて、1回につき150～300枚程度の画像を記録に収めることもできました。今回はその画像も交えて、琵琶湖一周の中で出会ったもの、感じたことなどを報告いたします。

2. 行程

地形や気候などを考慮した結果、湖北町石川をスタート地点として、そこから北上して西回りに一周することとしました。4月9日に石川から西浅井町塩津浜まで、5月21日に西浅井町菅浦まで、6月1日にマキノ町マキノ駅まで、6月15日に新旭町しんあさひ風車村まで、6月21日に志賀町北小松駅まで、7月20日に大津市堅田駅まで、9月1日に大津市浜大津まで、9月15日に瀬田川(淀川)に架かる瀬田唐橋を渡って草津市琵琶湖博物館前まで、9月26日に中主町あやめ浜まで、10月11日に近江八幡市長命寺まで、10月29日に彦根市新海まで、11月14日に彦根市彦根駅まで、11月23日に長浜市長浜駅まで進み、そして12月23日に湖北町石川まで帰ってきました。



3. 湖岸の変化1 不連続な浜の変化

「琵琶湖を見るために」一周を歩き始めたのですから、まずは琵琶湖の湖岸の状況について触れることにします。琵琶湖の湖岸環境は複雑に入り組んでいました。抽水植物と灌木が生い茂るヨシ原から、白砂青松の砂浜、歴史を感じさせる石垣積みから、コンクリートの護岸、そしてもっとも多くの面積を占めているように感じる緑地公園と実に多様な湖岸環境が形成されていました。多くの自然が残されたものから完

全に人工的な空間まで、それぞれの湖岸環境がそれぞれの地勢と土地利用のかたちの反映であり、単純に良い悪いと評価するわけにはいかないと思うのですが、それでも気になることが多くありました。



一周してみて初めて気づいた点として最も印象深いのが、自治体の線引きで湖岸の形が一変してしまうことでした。本来なら連続して変化しているはずの湖岸の環境が市町村境を境にして明らかに不自然に断絶しているのです。特に印象的な場所を2箇所挙げると、まずは湖西の新旭町と安曇川町との町境があります。この境を形成している神奈川という小さな河川をはさんで、新旭町の浜は完全に造園の手を入れた緑地公園と化しているのに対して、安曇川町の浜はほとんど自然のままの植生豊かな浜となりました。もうひとつは湖東の近江八幡市と能登川町との境で、ここの浜は干拓地なのですが、近江八幡市の浜が二次的ながら自然に形成されたヨシ帯をそのまま残しているのに対して、能登川町の浜は一見砂浜かと思ってしまうほど、その植生を丁寧に刈り込んでありました。なお、その浜に立てられていた「ヨシ群落保全区域」の案内板を見ると、近江八幡市側は浜の大部分が保全の対象となる区域に指定されているのに対して、この浜と明らかに連続した浜であるのに、能登川町側の指定区域はごく僅かとなっていました。これらの事例はそれぞれの市町村による湖岸環境の維持管理に対する考え方の違いの表れなのでしょうが、もう少し琵琶湖全体の景観を考慮に入れて事業を行うことは出来なかったのでしょうか。



また、湖西側ではほとんど目立たなかったのですが、湖東側ではほぼ全てと言って良いほどの砂浜が